アルコール依存症者のバウム・テストにおける一研究

藤　井　　憲

Ⅰ　研究目的

近年，寛容な飲酒文化をもつとされる日本においてもアルコール依存症及びその周辺の問題が取り沙汰され，問題視されてきている。そうした状況の中で，池田（1985）が「我が国のア症医療におけるCPの参画は未だ緒についたばかり」と言うように，この分野における心理療法家の存在や活動の意義が，今後さらに問われてくるだろう。

アルコール依存症者を対象にした心理学的研究はこれまで数多く，その中で心理テストを用いた研究も盛んに行なわれてきている。餅田（1982）によれば，その研究内容は，(1) アルコール症者の心理学的特異性を追求しようとするもの。たとえば，アルコール症者とそうでないもの―他の精神疾患や大脳損傷の患者たち―との差異を見出そうとするもの，(2) アルコール症者の中に見出される類型または多様性に着目し，これに焦点をあてているもの，(3) アルコール酩酊時の人格変容を確認しようとする方向のもの，に整理される。

心理テストのうち投影法に属するものの一つとしてバウム・テストがある。バウム・テストはスイスのKoch, C. が考案したものであり，簡単な教示のもと，被験者に実のなる木を一本描かせるテストである。Koch, C.（1970）が「樹木画に表現させるものは真の外観ではなく，むしろ，内にあるものの分泌物であり，内なるものの外に向かう働きであって，まさしく人間に似ているが，その内部存在においては性質を異にするような形態をなしている。それは心の“投影”であり，現れてくるものは，正確にいって，“顔”ではない」と言うように，バウム・テストは被験者を心理的に捉えることができるものであるが，同時に藤岡・吉川（1971）によれば，被験者を発達的にも捉えることができるものである。筆者の体験として，アルコール依存症者の中には，例えば一見年齢相応の人付き合いができるようだが，一方では妙に子どもっぽい側面を持っていたりする人がいるが，印象として，「発達的にクリアーされてくるべきものをクリアーしてこなかった」とか「うまく育ってこなかった」と感じられることがある。そのためアルコール依存症者を理解し，治療するにあたっては，その心理状態と共に人格発達を捉えていく必要があると考える。

そこで今回，バウム・テストを用いて，描かれた木の①大きさ，②幹先端処理，③根元の表現に着目し，アルコール依存症者を心理的，発達的に捉えてみたい。

以上の三点について，配偶者と同居しているかしていないかの生活形態及び入院治療か通院治療かの治療形態における比較検討を行なう。その際，仮説として，

- 配偶者と同居している群のほうがしていない群よりも描かれた木は大きい。
- 配偶者と同居している群のほうがしていない群よりも描かれた幹の先端処理は成熟しており，高い人格発達を示唆する。
- 配偶者と同居している群のほうがしていない群よりも根元の表現において，地面を描くことが多い。
- 入院治療群のほうが通院治療群よりも描かれた木は小さい。
- 入院治療群のほうが通院治療群よりも描かれた木の先端処理は未熟で，低い人格発達を示唆する。

を掲げる。

Ⅱ　調査について

調査対象は，アルコール依存症治療の専門医によって「アルコール依存症」と診断された，通院治療中の患者28名（うち女性４名）及び入院治療中の患者22名（うち女性３名）の計50名を対象に行なったが，今回は男性のみ（43名，平均48.2歳，26～66歳）を分析した。対象者には，属性（生年月日と年齢，最終学歴，生活形態，断酒期間）についての質問票とバウム・テストを実施した。生活形態については，同居者の有無及び同居者がいる場合，その続柄を明らかにしてもらった。実施においては，対象者に事前に調査の依頼をし，承諾を得た場合と心理検査を兼ねた場合とがあるが，どちらも個別に実施した。

バウム・テストを行なう際の教示として，Koch, C.（1970）及び高橋・高橋（1986）を参考に，「実のなる木を一本描いてください」とだけ伝えた。また描画に関しての質問については，描いている者の好きなように描いてもらってかまわない旨を伝えた。

分析方法については，以下の通りとした。

①　木の大きさについて

縦横10マスからなるシート（よって紙面全体が100

マスとなる）を用いて，描かれた木が何マス占めるかを計算した。

② 根元の表現について

・地面を表すものが描かれ，木の根元と分離しているもの，・地面を表すものが描かれているが，木の根元と連続しているもの，・地面を表すものが描かれず，木が浮遊している状態のもの，に分類した。

③ 幹先端処理について

藤岡・吉川（1971）の幹先端処理の類型―幼児不定型，幼型，人型，冠型，放散型，基本型，先端開放型―に基づいて，描かれた木の幹先端処理の分類を行なった。なお，混合型は幹先端処理のほうを優先させた。

Ⅲ 結果と考察

(1) 描かれた木の大きさは，全体の平均値が24.7マス（SD18.6，2～86マス）で著しく小さいものとなった。このことはアルコール依存症者の萎縮した自己や精神的エネルギーの乏しさを表すものと考えられる。さらに描かれた木の大きさと根元の表現の関連性を調べたところ，地面の表現のない群（23名，平均19.8マス）は地面の表現のある群（20名，平均30.2マス）に比べて，その木の大きさもより小さくなった。このことはアルコール依存症者の拠所のない不安定な状態や萎縮した状態を表していると考えられる。

(2) 描かれた木の大きさについて，妻と同居している群（23名，平均28.4マス）としていない群（20名，平均20.3マス）で比較した場合，妻と同居している群のほうが平均値は高くなったが，統計的な有意さは見出せなかった。一方，妻以外の者も含む同居者がいる群（32名，平均27.1マス）といない群（11名，平均17.5マス）で比較した場合，同居者のいる群のほうが平均値が有意に高くなった（$P > .05$）。さらに根元の表現と生活形態の関連性を調べたところ，妻と同居している者のほうが同居していない者よりも地面のある木を描くことが多いとはならず，相関は見られなかった。以上の結果から，結婚をしていることが人格の安定性を必ずしも表さないことが考えられた。一口に結婚と言っても様々なものがあるということ，即ちその結婚がいかに成熟したものであるかという質の問題が挙げられ，その中でも特に，お互いを思いやる気持ちや支える気持ちなどの愛情の問題が重要になってくるのではないかと考える。

(3) 治療形態による，即ち入院治療か通院治療かによる描かれた木の大きさの比較において，有意さは見られなかった。入院治療か通院治療かは患者の最初の医療機関とのつながり方や身体的・精神的状態とも関わってくることであり，最初の時点で選択されているわけではないため大きさの違いがないとも考えられる。

(4) 幹先端処理の分類について，妻と同居している群としていない群とに分けて行なったところ，どちらの群にも先端開放型の木が多かったことが特徴として挙げられる（妻と同居している群：7／23名，していない群：5／20名）。藤岡・吉川（1971）は，幹先端開放型の出現頻度は「極めて低い」としているが，アルコール依存症者の中では，必ずしも少ないと言えないと考えられる。このことはアルコール依存症者の未成熟さや人格発達の低さを示唆するものと考えられる。また，通院治療群と入院治療群に分けて行なったところ，先端開放型が占める割合は通院治療群のほうが高かった（通院治療群：10／24名，入院治療群：2／19名）。

以上のような結果となったが，今後の課題として，アルコール依存症者の結婚の質的側面を取り上げ，どのような経緯から結婚に至ったか，また現在配偶者とはどのような関係にあるのかを丹念に検討していきたい。また，今後さらに対象者の数を増やしていきたい。